

昭和二十三年九月一日發行
平成二十一年一月一日發行
總發一〇一三號
日發行

京鹿子

1月号

京鹿子祭特集号

— 近 詠 —

神迎え 丸山佳子

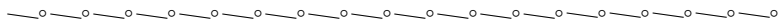
深 呼 吸 は 一 日 一 善 神 無 月

裸 並 木 に 不 満 の 相 は 一 本 も

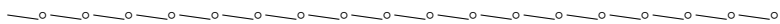
栗 ひ ら う 京 都 市 民 で あ り が た し

狛 犬 の お す ま し が ほ よ 神 迎 え





今といふときは今しか蹴鞠の儀
言葉にも体温ありて事始
柿むいて胸襟ひらきすぎしかな
鳥瓜すんなり好きにまだ一会
小雨なか何さがしぬる晩秋蝶
百日を冬將軍の押し引くドア



豊 田 都 峰

清響集 その九十三

影 と 来 て 影 一 点 と な る 寒 禽
冬 鳥 の 次 の は 首 を 曲 げ る た り
石 に 座 せ ば 同 心 円 に 落 葉 降 る
西 し ぐ れ 東 そ ば え に 竹 生 島
水 鳥 や 沖 な る 雲 の ま た 溶 く る
小 春 な り 次 の 林 へ 二 町 ほ ど



木枯の灯よりころがりである晩年
没日をふところにして枯芒
枯尾花下弦の月とふたみこと
焼芋屋つむじの辻のこぼし笛
ひとひらの木の葉は山のはつたより
霜そだつ日記を閉ぢしよりのこと
雪虫やきのふもひぐれに逢ひもして
雪のきて里は藁屋の嵩にして

秀華採集

忘れものが追ひかけてくる秋の暮

田村 みどり

「秋の暮」の持つこの表現は納得させて十分なものがある。言い尽くされたこの季語もまだまだ汲み取れないものがあることを知らせてくれる作品である。

父の忌に染め上がりたる曼珠沙華

丹羽 武正

露の世や昔にむかしありにけり

大槻 光枝

ともに中七のあしらいを評価したい。丁度合ったことへの感謝、はかない世ではあるがそれはそれなりでよいとする思い。

近詠

浮寝の鳥

無言ほど強きものなし冬羅漢
有頂天と謂ふ天ありて冬ぬくし
なかんずく嗤わらひ羅漢に今日小春
いまさらに明治のあの世一葉忌
風の音に討入りの日の遠耳に
彩添へてゆめの真中の浮寝鳥
ひと声は浮寝の鳥の北想ひ

鈴鹿
仁

神麓集



新関 一 杜

低屋根が街一杯の冬の虹
みちのくの紅の花より寒の紅
芭蕉着た紙衣にそつと手を触る
寒卵割るやごつんと音をたてて
ふがいなくワンタンすすり寒の帰路

涅槃図 林 日 圓

松木立無明のやうな深い霧
蒼穹に靈山の峰冬もみぢ
等伯の松林図屏風国宝に
雪洲より五代と書けり涅槃絵図
等伯の涅槃図滑車にて吊す

大雄山最乗寺 北村 香 朗

最乗寺の莊嚴映ゆる秋の灯
本堂に秋の調べの笙篳篥
秋親し寺で雅楽を聞こうとは
秋霖や堂塔巡るおくれがち
結界に阿吽の天狗秋霰雨

大枯木 藤岡紫水

道念や日射し全き大枯木
愛憎の消えゆき日々や柳散る
芦刈つて遠くなりゆく湖の空
灯を消して水に返せし秋のこゑ
淡々と日照雨よろこぶ枯芭蕉

氣比翼句碑 和田 照 海

花芒鯖街道の辻の句碑
表より背戸の水韻比翼句碑
人怖ぢせぬ奥比良の瑠璃鵲
影よりも音に驚く下り鮎
ゆく秋や堅田は湖を真開きに

松田 都 青

星飛んで小さな闇を折り畳む
秋蚊刺す意中の人と決められし
自己愛のあとの虚しさ燕去ぬ
釣られたる魚の船酔ひ秋時雨
うそ寒き言葉の裏を子が通る

神麓集



秋澄んで胸一点の影残さず
 脳天の腫瘍も消えて秋高し
 万才を叫びたくなる爽かさ
 強運や今日の医学に逢ふ秋晴
 新米を得て赤飯を妻は炊く

高木 智

痛む腰いい子とさすり日の短か
 外出は通院時のみ天高し
 病みて聞くラジオの秋の唄身にしむ
 痛み止め効きあまるうちに秋便り
 秋深む深夜発熱なすすべも

山田をがたま

己丑元旦 竹貫 示 虹
 初明り八十年の牛歩かな
 尋牛の千里は遠し大旦
 反芻のまた始まりし年賀状
 牛どしの思ひばかりがあともどり
 初鴉酔へばむかしはよかりけり

秋しのび寄る 丹生をだまき
 酷暑残暑に堪へきし髪膚いとほしむ
 めくり忘れしカレンダーに秋しのび寄る
 気象情報台風の眼はまん丸く
 神将に喝入れらるる萩の寺
 添水鳴る等間隔に闇区切り

萩素風 北川 孝 子
 萩素風まつ先に問ふつつがかな
 思ひ込みすこし離れて初月夜
 入念てふ生来の性栗をむく
 刈田に雨昼を灯して蕎麦処
 比叡より雲おりてくる夕刈田

秋 光 萩野 千 枝
 還らぬ史かへす秋光千号誌
 巻きたてにうす紅いろの針生姜
 野点 蕙 茶 筥 振る音か蟋蟀か
 うつり香を風に散らせり秋扇
 名月や総身とろけて浜の湯に

海道賞受賞作品

京都府

松田都青

既作

寒林をいくつ抜けても曲り角

闇汁や秒針不意に動き出す

虹の輪に神見るまでの不眠症

万雷の拍手のなかの懐手

黙祷のあとしばらくは萩でゐる

古稀を過ぎ詩情ゆつくり冬の彩

花のあと滅びの風の腥し

銀寒の裳裾にありて星を汲む

陣痛が続く寒夜の火消壺

打ち終へし花火のみんな無精卵

新作

秋霖の微熱持つ暮父帰る

時雨あと泣いて体を軽くせし

一願の小石投げれば山に雪

こめかみに血の寄つてくる花の闇

流木を拾へば寒い木に戻る

星飛んで風の生まれる海を見し

石をもて打ちたるごとく枯れ尽くす

眼の奥に海の溢るる木の葉髪

少しづつ本音を吐いて繭に入る

石投げて音の帰らぬ春愁ひ

冴え冴えと忘れがたきを燃やしゐる

風光る無色と言ふは忙しき

低音にこだはる弱さ寒の風

加速なき音搔き消して大枯野

合掌は黄落の音の消ゆるまで

海原の時間の外で海月浮く

冬深む齒ごたへ程の余生とも

消ゆる日も会ひたき人や夏の月

眼でわかる男の重さ落葉散る

花山に日暮れ来てゐるをとこ道

京鹿子大賞受賞作品

千葉県

伊藤希眸

大瑠璃に俗耳はなれていくばかり

船底に臍の座り処秋の海

梅雨ごもり猥一頭を育くまむ

数珠玉のこぼる或る日の空腹感

桑の実熟れ少年Kの厚き唇

懐妊の細身をうつす後の月

草や木のひたすらな黙暑に抗す

飯三度秋の眞ん中めんたいこ

涼しさの次になすこと薄刃研ぐ

秋蝶の風のかたちになる一瞬

風鈴のこつと骨音蔵はれる

鴉鳴いて藍絵の富士の低さかな

十指よりこぼる夜語りシヨール編む

白梅や持ち重なりて漆椀

韋駄天に加速つきたり山に雪

春の泥捏ねるだけ捏ね妻擬き

灯明のやうに麓の冬ざくら

山なみや百万噸の桜咲く

風神は琳派か紅葉吹き上げる

心音を野の風と聴く余寒なほ

大蔵の夜をゆらせり貨車の列

二人静一人静と転勤す

厨まだ低音なりし牡蠣の殻

芽吹く音うすむらさきに壺の耳

雪ほろろ闇の表に息を足す

夜の蛾やサスペンス劇果ててをり

山風の父と打ちあふ大氷柱

きやうだいの皆消え海星うら返す

氷瀑のうらは迷宮かも知れぬ

白百合の白秘む海軍兵学校

京鹿子新賞受賞作品抄

京都市

佐藤眞隆

片蔭に口ひらきたる骨董店

僧房に猫と五勺の今年酒

山姥も捨子寝かせて夏の月

野仏に一つ石積む秋の暮

暁のあれは寒露か法師蟬

長江の魚木に登る達磨の忌

棚経の僧にぐりぐり咽喉仏

山寺は桶の底まで木の葉かな

秋風やあとかたもなき会葬者

戒名のからくれなみに卒塔婆焚き

中腹に煙ひとすぢ秋の山

山鳩のててぽぽてと年の暮

京鹿子新賞受賞作品

京都市

津野洋子

ほととぎす金箔光る釘かくし

十三夜駅に端切の小座布団

観劇の名残りをたたむ絹扇

仏足へ午後の日溜まる雪ばんば

かなかなや上座のひとつ空いてをり

飛ぶ鳥の貌よく見えて小六月

木守柿朽ちゆく家の鬼瓦

寺小春しきりに動く猫の耳

山墓のなべて苔むし雁の声

木枯や電光ニユースせり上がる

白壁へ風の影おく竹の春

薪積んで百の切口冬用意

京鹿子新賞受賞作品抄

京都市

仲井多美江

国見せし鳶の一声夏来る

終点が始発の駅にちちる鳴く

めまとひに慕はれ杣の土均す

待針の数を確かむ秋灯下

山ひとつ越えれば湖国稲穂風

茅葺の縁者つづきや蝗とぶ

放し飼ふ鶏も木陰に蝉時雨

葉を脱ぎし木より瞑想鳥渡る

翡翠の声をこぼして溪住ひ

嫁ぐ娘の衣ぬふ杣十三夜

指先の読む鎌の切れ雲の峰

褐色に全音あがる秋出水

募集大作賞

福山市

上原 榮子

虎落笛

ちぐはぐに呑む錠剤や寒明くる
襟足に二月の風の刃ものめく
絹糸のぴんと鳴らして寒戻る
玉章のひと文字ごとに郷の春
遠霞こころ待ちとは長きこと
鏡台の後ろの昏さ蝶の屋
ゆるやかにすすむ晩年花筏

記憶から外してをればなめくぢり
存分に濡れてひとしほ沙羅の花
言ふことを聞かぬ抽出し戻り梅雨
ペン皿に鉛筆混じる河童の忌
かりそめの恋やもしれぬ酔芙蓉
尾花剪る風のもつれを解くやうに
鯛雲流るる方へ歩みける
虎落笛もう産土へ戻れない

双 滴 賞 受 賞 作 品

都 峰 三 賞

緋ぼたんの天のうづめとなり揺るる

上澄みはうすむらさきの芽木林

羅でひと日を水のごとく居る

佳 子 三 賞

丈六の御身の仏足石に飛花

毎年の無事を知らせて蛇の衣

指紋の渦もう巻き込まれぬ八十の秋

松 田 曼 莉
奥 田 筆 子
林 日 圓

大 谷 茂 樹
高 屋 恵 理 子
荻 野 千 枝

双滴賞



京都芸術文化協会賞 京都市 林田 紀子

受賞作品

鍵穴に遊びのありて十三夜

京都府知事賞 京都市 鈴鹿 均

京都新聞社賞 千葉県 伊藤 希眸

表札はこの一樹なり蝉の穴

げんげ野や縄文土器に指のあと

京都市長賞 大阪府 寺岡 直美

読売新聞社賞 大津市 鈴木 順子

太陽はいつもまんまる海道忌

白障子部屋の真中にゐる不安

京都商工会議所会頭賞 京都市 中西 久子

毎日新聞社賞 東京都 坂本 敏子

僕少し上むいて泣く卒業歌

三伏や棚に書物の凭れ合ふ

朝日新聞社賞

奈良県

小谷 知里

双滴賞

京都市

富崎 静代

源氏でも平家でもよい蛭がり

青田波村に民話のやうな嫁

KBS京都賞

千葉県

直江 裕子

双滴賞

京都市

岡本きみえ

七十のこれから桃がやはらかい

踵より踏み出す舞楽菊日和

NHK京都放送局長賞

京都市

岩崎 憲二

双滴賞

天理市

佐藤 香女

赤紙も二度生き抜きて敬老日

蝌蚪の陣乱して里を日帰りす

京鹿子祭賞

京都市

西條 李稷

双滴賞

京都市

井尻 妙子

桐一葉風に思案が裏返へる

まん中に母在る暮しうちは風

京鹿子祭賞

城陽市

濱口 紫星

底ぬけの空をささへる大青田



京鹿子集

豊田都峰選

秋海棠雨はくちびるより零れ

霧こめてひとりひとりの富士の山

榎の実のわらわら女走らす

忘れものが追ひかけてくる秋の暮

秋時雨水尾ふれあひしのみなれど

あの尾根で折り合ひつける雁渡し

嬉しさもすこしあるらし葛の花

勝手口氣品を添へる水引草

父の忌に染め上がりたる曼珠沙華

盆用意メモに聴ゆる母の声

東京 田村みどり

墓参りあの子この子も代替り

杉の香の割箸ほのと敬老日

すれ違ひざまの暑さありにけり

土用東風干すもの多き農の軒

露の世や昔にむかしありにけり

秋定演娘の晴れ姿受話器より

サツカー好き二十一 人友集め

天高くリレー我が子は赤組に

秋茄子や分け隔てなく老淑女

無花果や小振りを好む米夫人

亀岡 大槻 光枝

アリソナ 伊吹 之博